

ベトナムのフエ・明郷（ミンフオン）における 天后信仰の多面性と動態性

黄 蘊

Multifaceted and Dynamic Aspects of Tianhou Belief in Hue Vietnam

HUANG Yun

本稿はフエ都城北郊外フォンヴィン（香榮）社明郷（ミンフオン）村にある媽祖を祀る天后宮という宗教施設に焦点をあて、中国にルーツをもつ「明郷（ミンフオン）人」と明郷村のキン族住民とはいかに天后信仰にかかわっているのかを考察するものである。

天后宮は、明の滅亡前後にベトナムに渡来した中国系移民によって1685年に創建されたとされる。今日ではそれは、ほぼ「明郷人」のアイデンティティの唯一のシンボルとなっている。天后宮をめぐる祭祀活動への参加、天后信仰は「明郷人」であることを実践する媒体と捉えられる。一方で、子を授ける女神として、天后信仰は村内外のキン族女性にも波及し、多数の信者を集めている。本稿は、このような天后信仰のあり方の変遷、それをめぐる多層的な状況を描き出し、「明郷村」、また「明郷人」のあり方の変化を考察してみる。

キーワード：フエ、明郷村、「明郷人」（ミンフオン）、天后宮、天后信仰

問題の所在

本稿はフエ都城北郊外フォンヴィン（香榮）社明郷（ミンフオン）集落の天后宮を対象に、中国にルーツをもつ「明郷（ミンフオン）人」と明郷村のキン族住民とはいかに天后信仰にかかわり、人々の重層的な意識形態とその実践活動から天后信仰をめぐるいかなる多面性と動態性がみられるのかを考察するものである。

明郷とは1644年の明の滅亡前後にベトナムに移住した中国系移民の子孫のことである。彼らはキン族社会への同化を選んだ社会集団として、中国系としてのアイデンティティを保持している華人とキン族の中間に位置するものとみなされる。ベトナム中部に位置するかつての貿易港だったホイアン（会安）に、明清王朝交代期に脱出した中国系の移民たちの作った「明香社」というコミュニティが遅くとも1650

年頃までに形成されていたとされる¹⁾。「明香」という名称の意味は、明の伝統、または「香火」を継ぐというもので、「明香社」の人々はかくして明の伝統をまもろうとして海外に逃亡した遺民である²⁾。この明香社というコミュニティの名前はホイアンにとどまらず、フェや南部のガーデンにおいても中国系移民集落の名称に使われた³⁾。

1827年にベトナムに定着した中国系移民とその子孫たちが暮らす「明香社」は、阮政権の政策のもとで「明郷社」に改称されることになった。さらに1842年に定められた規定により、外国人としての清人（中国系移民）とベトナム人の一範疇としての「明郷」籍という区分がなされた。そして、ある地域に5人以上の「明郷」籍の人間がいれば、明郷社という行政単位を組織させることとした⁴⁾。こうした規定は、「明郷」籍という特殊なカテゴリーに属する人々をベトナム人と認めた一方、彼らの独自性をも同時に認めるという当時の阮政権の態度を反映している。

本稿で扱うフェ都城近郊の明郷集落は、ホイアンの「明香社」とほぼ同じ時期にできたとされる。西山朝期（1786-1802）までに「明香社ホイアン舗」に属していたが、それ以後「明香社清河舗」として独立した。上記1827年の阮政権の規定により同年に「明郷社」へと改称した。フェの「明郷社」に住む中国系移民の子孫たちは、阮政権の積極的な同化、懐柔政策のもとで政府の役人や商業といった職業につき、土着化の道を歩むようになった⁵⁾。

今日、フェ明郷村の明郷子孫の多くは、これまで村外移住やベトナム戦争終結後の国外脱出ラッシュを経て、すでに他所やアメリカなどの外国に移住するようになった。明郷の世代数の減少とキン族住民の村内移住をもち、かつての「明郷」としての独自性が失われつつあることは事実として否めない。加えて、今日では明郷の子孫の多くは自らをキン族と自認し、「明郷」というエスニック・アイデンティティは極めて曖昧な状態にある。また、現実として今日法的には「明郷」というエスニックグループもしくは身分はすでに消滅しており、それが人々の意識の中にしか存在しないカテゴリーなのである。

そうした中で、1685年に創建されたとされる天后宮という媽祖を祀る宗教施設は「明郷人」のアイデンティティの唯一のシンボルともいえ、天后宮をめぐる祭祀活動への参加、天后信仰は「明郷人」であることを実践する媒体になっている。一方で、子を授ける女神として、天后信仰は村内外のキン族女性にも波及し、多数の信者を集めている。本稿は、この天后信仰のあり方の変遷、それをめぐる多層的な状況を描き出し、「明郷村」、また「明郷人」のあり方の変化を考察してみたい。

なお、本稿では、「明郷人」を先祖が中国からきた人で、現在すでにベトナムに土着化した人々を指す用語として用いる。彼らのほとんどは自らをキン族と自称しており、ただキン族と違うのはそのルーツがかつての中国に求められることだけである。「明郷人」に対して、明確に中国系としてのアイデンティティを有する人は、今日ベトナムで「華族」と呼ばれ、少数民族の一つとされている。本稿ではこうし

1) 陳荊和1970年「会安明香社に関する諸問題について」『アジア経済』11（5）：79-92頁、三尾2006年「中国系移民の僑居化と土着化：ベトナム・ホイアンの事例から」『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』風響社、85-102頁。

2) 陳荊和前掲書 81頁。

3) 三尾 2009年「華僑華人——中部」『ベトナム文化人類学文献解題——日本からの視点——』風響社、133頁。

4) 三尾2006年、89-90頁。

5) 陳荊和1959年「承天明郷社興清河舗——順化華僑史之一頁」『新亞学報』4-1：313-315頁。

た人々を中国系住民、もしくは華人で表現することとする。一方で、フオンヴィン（香榮）社明郷集落とその近隣の村で行ったインタビュー調査から、この二つのカテゴリーが混合して認識されるということもあることが事実としてみられる。

中国系（漢人）社会における宗教祭祀とその単位社会の分析概念として岡田が「祭祀圏」の概念を提起している。岡田によると、祭祀圏とは「共同的に行われる祭の各々に就いて、その祭を行う人々の居住地」であるという⁶⁾。岡田以後、「祭祀圏」概念をめぐる、荘、林、三尾などにより、さらなる議論と提起がなされた。そのうち、三尾は漢人（中国系住民）の祭祀は必ずしも地域的なまとまりを前提とせず、むしろ個々の人の祭祀活動、そのような関係性の蓄積が一つの「祭祀圏」の広がりや寄与しているとし、重要な提起を行った⁷⁾。三尾による祭祀圏の再定義は、祭祀活動の圏域から人々の生活領域、社会関係の広がりを捉えるという点で意義を有している。本稿は三尾による「祭祀圏」概念に基づき、地域に限定されない天后信仰に関わる人々の祭祀活動の圏域を一つの祭祀圏とみなし、関係の分析を行っていく。

上述のように今日天后信仰の祭祀圏の内部構成としては、明郷子孫である人々以外に、明郷村の内外のキン族住民の存在もあげられる。明郷人とキン族住民とはどのように異なる意識に立脚し、天后信仰にかかわっているのか、天后信仰をめぐる祭祀圏はどのような広がり方をしているのか。本稿は天后信仰の祭祀圏の実態とその拡大への考察から明郷村、明郷人をめぐる社会関係の変動を描き出していくことをめざす。

1、明郷村、明郷人と天后宮

1.1 明郷村と明郷人のカテゴリー

明郷集落の歴史の変遷については、陳荊和（1959）、野間・西村（2009）などの研究があり⁸⁾、本稿はそれらに基づき、以下明郷集落の形成とその地理的範囲、明郷村をめぐる社会変動を概観しておく。

17世紀半ば、明滅亡後中国から移住者が渡来し、大明客舗と呼ばれた居住区をなした。それは行政的にホイアン（会安）に所属していたとされる。大明客舗はのちに、明香社清河舗と呼ばれるようになり、西山朝期の1786年にホイアンの明香社と行政的に分離した。そして、1815年に清河と分離して、明香社として独立行政単位になり、さらに1827年に明香社から明郷社に改名した [陳 1959 : 311]。明郷社は上記明末に渡来した中国人商人が創建したものとして、17、18世紀のフエの港及び商業区として有名であった [陳 1959 : 305]。

1898年には、明郷社の税金はベトナム人（キン族）と同額にされ、キン族集落との差異が消滅したとされる。

6) 岡田「台湾北部村落に於ける祭祀圏」『民族学研究』4(1) : 3頁。

7) 三尾 1991年「台湾漢人の宗教祭祀と地域社会」『国立民族学博物館研究報告』, 110頁。

8) 陳前掲1959年、野間・西村ほか「ベトナムのフエ旧外港集落の天后宮と閩聖殿の調査基礎報告」『東アジア文化交渉研究』2 : 261-288頁。

明郷集落の空間領域の変化として、17-18世紀に隣接の清河、地霊の土地を購入し、徐々に拡張を実現した。しかし、西山朝期の1787年に地霊村が関帝廟周辺の土地を明郷社から取り戻すことに成功し、以後、明郷は集落前の川の洲土などを中心に拡張した。明郷の集落自体は西山朝期に重い税に苦しめられ、住民の多数がほかに移住するなど大きな打撃を受けた。加えて、19世紀以後、阮朝のフェ都城建設に伴う周濠の造成が川の水流変化を起し、大型帆船の接岸が困難となり、明郷集落の商港機能は衰退した。それに伴い、商業的中心は、フェ都城に東接し、現在の華人会館が集中するチーラン通り (Chi Lang) や褒榮 (バウヴィン) へと移っていった。

1962年以後、明郷村と清河村とは行政的に合併して明清村になったが、現実的に生活者である人々の意識、それぞれの村の行事は厳然として分かれており、明郷村そのものの独立性は依然保たれているといえる。現在明郷村の世代数は163家族である。村人の話によると、もと村出身の多くの人は、これまで生計を立てるために、すでに他所や外国へと移住した。また、後述する Trần Tiễn 氏子孫の90%は1975年以後の出国ピークにより、国外、とくにアメリカに住むようになった。村に残される明郷の子孫はかなり減少しているという⁹⁾。

一方、今日明郷という表現には、地理的な範疇をさすものと、帰属意識の表明という二重性がみられる。地理的範囲、村落名称として明郷という表現が使われているが、先祖は中国から来たという帰属意識、そうした人々のカテゴリーを指す言葉として明郷も使われている。明郷村の関係者、インフォーマントたちはしばしば両者を混同して使用していることがみられる。

本稿では基本的に帰属意識という意味で「明郷人」という表現を使用することとする。

1.2 天后宮と関聖殿

天后宮小史

天后宮 (Chùa Bà) の創建は初期の明香社清河舗にとって大きな出来事であった¹⁰⁾。その推定創建時期は1685年とされ、中国からの移住者が彼の地に移住し、定着したまもない頃であったことが分かる。

初期の天后宮の祭礼や各種行事の実施において、Trần、Lâm と Luur の三つの氏族は中心的な存在だったとされる。そのうち、今日の明郷村を構成する重要氏族である陳氏一族の一代目陳養純 (Trần Dưỡng Tuân) は1644年から1652年の間に渡来したという。そのほか、Lâm 一族の一代目である Lâm Đức は1717年頃に移住してきた。Luur 一族の一代目である Luur Tát Đại に関しては正確な渡来年代が分からないが、16世紀から17世紀の間だと推測される¹¹⁾。

かつての天后宮の建築として、正殿、前堂、長廊などがあった。その面積は年月をかけて次第に広が

9) 本稿のもととなる現地調査は2009年8月、9月にフォンヴィン (香榮) 社明郷村とその周辺で行われたものである。本稿で使う調査データはその時に行われたインタビューによる。

10) 明郷村の関係者は、天后宮また神としての天后を Chua Ba と呼び、関聖殿を Chùa Ông と呼んでいる。本稿では以下インフォーマントたちの呼び方に基づき、天后宮、神としての天后を Chùa Bà、関聖殿、関帝を Chùa Ông で表現する場合がある。

11) Trần Nguyên Đăng による手書きの資料「天后宮の創建について」による。原文はベトナム語である。

ったものとされる¹²⁾。

1946年に戦争によりメインの建物が焼失し、先賢堂のみが残った。1958年に村人や省内出身の明郷人が重建委員会を結成し、天后宮の再建に取り組んだ。

今日では、天后宮（Chùa Bà）は明郷関係者の帰属意識の宗教的シンボルと捉えられると同時に、明郷村のキン族（とくに女性）の信仰を集める存在でもある。

関聖殿とその位置づけの変化

一方で、天后宮のほかに、明郷村の人はもう一つの宗教施設となる関聖殿（Chùa Ông）をも建てている。関聖殿の創建時期は不明だが、かつての明香社の地理的範囲が今日の地霊村に及び、明香社の人々がそこに関聖殿を建てたとされる。関聖殿に天后宮と同型の鉄製香炉（乾隆45年、1780年）が置かれており、当香炉には関帝と観音菩薩を祀ったという記録が記されている。

1787年に明郷村は、地霊（ディアリン）村との土地をめぐる争いで、地霊村に土地を返還したとともに、関聖殿（Chùa Ông）をも一緒に返すことになった。その後の1841年になり、阮王朝の君主が祈雨の祭祀のため、Chùa Ôngを一時借りる（2年間）ことになった。Chùa Ôngが借用された間に、明郷村の関係者は、中国からも一つのChùa Ông像をもらってきた。そうした経緯から、関聖殿（Chùa Ông）が隣の地霊村に返されたあとも、明郷村の住民は関聖殿とその信仰にかかわっていたことが分かる。

現明郷村の長老によると、1945年頃地霊村の仏教関係者は関聖殿を仏教化させ、村のお坊さんがそこを管理することになった。さらに1955年に前殿に仏教式殿堂を作り、供え物も精進料理に限定されたため、明郷村の関係者はしだいに関聖殿に参りに行かなくなったという。ただ、旧暦の6月24日の「関帝誕」の時だけ、数人の明郷関係者が参りに行くことにしている。

複数の明郷村の長老、自認明郷人のインフォーマントの話では、天后宮（Chùa Bà）と関聖殿（Chùa Ông）は本来明郷関係者にとって同じように重要で、その地位も一緒であった。しかし、関聖殿（Chùa Ông）の所有権をめぐる変動があったため、今日明郷関係者の信仰の中心は天后宮（Chùa Bà）に一本化するようになった。

2、天后宮の祭礼と組織運営

2.1 天后宮の祭礼

天后宮の年間の重要な祭礼として以下があげられる。

1月16日：年頭の祈安

城隍神廟で供え物を捧げ、正殿で儒礼を行う。上元節の1月15日から一日をずらしているのは、その日は仏教的慣習により肉料理のお供えができないからという。

1月17日：婦人の礼

明郷の女性のための祭りである。現在村のキン族女性、また村外の女性参加者も多数参加していると

12) 陳前掲1959年、316-317頁。

みられる。

3月23日：天后の忌祭

本宮最大の行事である。内外の明郷人が集まる機会でもある。

7月16日：先賢祭礼

別称百族の命日、あるいは秋祭。先賢堂で村の創建者や、歴代朝廷に仕えた村出身者、村の役職者を祀る祭礼である。

11月22日：陳踐誠（Trần Tiễn Thành）の誕生日

陳踐誠は陳一族の7代目で、欽差大臣などを歴任したフェ明郷の出世頭、村に土地を寄付するなど貢献が著しかった。この日に参りに来るのは Trần Tiễn Thành の子孫のみである。

2.2 組織、運営

天后信仰にかかわる祭祀儀礼は、村内部の宗族的組織によって取りまとめられ、仕切られるかたちになっている。現10代目の長老 Trần Nguyên Đăng によると、1610年から1945年までに、明郷村に、天后宮の祭礼を司る儀礼班という組織と、村の行政組織とは並行して存在していた。1945年以後、天后宮の行事を取り仕切る儀礼班は、社会システムの変動を経ながらも、族長など長老を中心に組織の形態を維持してきている。

祭礼運営の儀礼班と資金運営

現儀礼班は2003年に新たに選出されたもので、班長、副班長、会計係、秘書の四人からなる。そのうち、班長はフェ市内に住む Lâm Sinh で¹³⁾、副班長は村に住む Trần Nguyên Đăng である。なお、この儀礼班の成員として、明郷の子孫以外の参加は認められない。

天后宮の祭礼の資金の出所については、三つの歴史的時期に分けてみる事ができる。1610年から1880年までは、村の住民たちが寄付金を出し合って、資金を拠出していた。1881年から1975年までは、村の有する田んぼの収益から資金を拠出した。村の田んぼに関しては、1870年に陳踐誠から42畝の土地の寄進があり、それが香火田として収入を得ていた。

1976年以後、明郷村所有の田んぼは政府の管理下におかれるようになったため、村の住民や、海外に住むもと明郷の住民から寄付を集め、祭礼の資金にあてている。

なお、資金運営に関しては、Chùa Bà 基金という基金が設けられている。これは明郷の27姓（多くは他所に移住している）の寄付により作られた基金である。現在海外に住むアメリカ、フランスの明郷子孫からも寄付がよせられている。Trần Nguyên Đăng は Chùa Bà 基金の管理を行っており、祭礼の支出金はそこから拠出されている。

13) Lam Sinh 氏はフェ市在住で、螺鈿細工を生業としている。氏の祖父、父の世代も天后信仰にかかわる儀礼班の中心メンバーだったという。

女性信者の組織である婦人会

今日天后信仰の重要な一部分として、女性信者による信仰形態がある。それは明郷子孫に限定されることなく、村内外の女性に広まるかたちでの信仰である。こうした女性による信仰の中心組織に「婦人会」がある。

「婦人会」は1月17日の婦人の礼を行うために発足した女性組織である。それは百年以上前からある組織で、現在のメンバーシップとして村の女性ならだれでも入れる。現婦人会の主要メンバーはフエ市内の女性有志と村の富裕層とされる女性たちからなっている。現婦人会委員長は80代のフエ在住女性である。Luu というもと明郷村の子孫で、Chùa Bà への信仰心が篤くまた経済力もあることでリーダーを務めている。

インフォーマントへの聞き取り調査によると、女性たちは1月17日の婦人の礼の時に祭りを行う理由に、商売繁盛、家内安全、または子宝に恵まれることを祈ることが挙げられる。とくに子供ができることと、商売繁盛という二つにおいて、願いがかなった人が多数いて、明郷村以外の信者も多数いるという。

例年では、1月17日の祭礼時にくる人は70、80人程度だそうだが、2009年には10人の参加者があったという。そのうち、村人はわずか10人程度で、残りは全部村外からの参加者であった。

3、天后信仰をめぐる信仰形態の重層性

明郷子孫による天后信仰の形態

今日、明郷村では、家譜などを根拠に明確に明郷の子孫であると確認できる人の中でも、祖先が中国からきたという意識を明確にもつ人もたない人にも分かれている。そのうち、自身がすでに完全にキン族だという人でも、実際に祖先の「伝統」をまもろうとして、天后信仰に熱心にかかわっている例も少なくない。このように、本人の自覚と行動にずれが生じているが、そうした状況は明郷子孫の今日におけるアイデンティティのあり方のファジーな状態の表われといえよう。

以下では、いくつかの明郷子孫の事例を取り上げ、彼らの天后信仰へのかかわり方とその帰属意識の様態を考察してみたい。

事例1 Trần Nguyên Đăng (男性、70代)

陳踐誠 (Trần Tiến Thành) 一族の10代目、天后宮の祭礼の儀礼、運営などを司るトップである。村人から宗教的、宗族的な意味での村長とみなされている。10代目の最年長として Đăng の兄がいるが、その兄はほかの省に住んでいるため、村内にいる Đăng は10代目の最上位の後継者となる。

Đăng は8代目の人から儀礼に関する知識を教わり、現在自身の後継者となる11代目の人に関係の知識を伝授している。現在の役目はすでに長く務めており、本当はやめたい気持ちもあるが、責任感により、後継者が育つまで継続するという。

Chùa Bà に対しては、自分は Chùa Bà の子孫だと認識し、自身の責任を十分に果たさないと恐れ多いと語る。

事例2 Châu Thu Sang (女性、70代)、Trần Châu Đức (男性、40代) 親子

明郷出身者であると自認する。実際 Châu Thu Sang の出身は Anlai 村で、夫は Trần Tiến 一族の10代目である。Châu Thu Sang は定年まで小学校の教師を務め、2男1女を育てた。長男、次男は共に鍼灸を学び、現在長男の Đức は家で漢方の診療所を開いている。一家は族譜の編纂、保管に対する意識が高いことがうかがえる。

Chùa Bà に対しては、Chùa Bà が中国系の神だという認識をもっている。重要な祭礼時に天后宮に行っている。娘は Đà Lạt に住むが、帰省時に祭りがあれば参りに行っているという。

母親の Châu Thu Sang は1月16日、17日と3月23日という三つの祭礼時に天后宮に行っている。と同時に仏教に対する信仰心も篤く、月に10回ほどフェ市内にある Quang Te 寺に行っている。なお、最近では仏教に専念しているため、あまり Chùa Bà には行っていないという。

仏教と Chùa Bà は自分にとって、ともに個人の悩みを解決してくれる存在なので、同じように力があると認識している。ただし Chùa Bà は信仰であると同時に先祖の伝統でもあるという。

長男の Đức の話では、1975年までに多くの中国系の人々が Chùa Bà を拝みに行っていたが、解放後人が亡くなったり、移住したりして住民が減少している。現在自分はまだ若いので、運営委員会のメンバーになっていないが、将来的にもし要請があれば、運営委員会の一員として力を捧げていきたいという。

事例3 Cam Mậu Cường (男性、50代)

現在キン族であると自称する。カラオケ屋を経営している。自分の祖父と曾祖父は漢方医をしていた。先祖は中国からきたという事実を知っており、家に祠堂もあるが、現在、自分は中国人の子孫という意識が薄いという。

天后宮の儀礼班の書記という任を解放後より30年近く担当している。その理由は、会計の仕事の経験があり、ある程度書記の条件に合致していたことと、村長相当の地位にある Trần Nguyên Đăng から指名されたからである、としている。

妻はキン族で、この村の出身者である。妻の Chùa Bà に対する信仰心が篤いという。なぜなら自分にとってご利益があるからである。

Cam は会計の仕事と同時、天后宮祭礼時のお手伝いもしている。Cam にとって Chùa Bà より城隍の方が重要である。なぜなら、Chùa Bà は女性の神、城隍は男性の神であるからという。

自身の Chùa Bà への信仰は、神への信仰心と、伝統を守っていく意志、という二つの理由に基づくものである。

隣村の地霊村の中国系住民

Khuong (70代、男性)、Hầu (50代、男性) は隣の地霊村に住み、自他ともに中国系という認識を有する。しかし、両者の天后宮に対する態度に違いがみられる。前者は Chùa Bà を中国人性の象徴とみなし、なお、「明郷」というカテゴリーと「中国系住民」とを混同して捉えている。対して、後者は「明郷」と「中国系住民」とを分けてみなし、中国系の会館を自身のエスニック・アイデンティティの象徴としている。

事例4 Khuong (70代、男性)

Khuong は、祖父の世代から海南島から渡ってきた移民三世である。妻はキン族。Khuong は以前服の仕立て屋をやっていたが、現在はやめている。

自分が住む地霊村の Chùa Ông と隣村明郷村の Chùa Bà の両方に行っている。Chùa Ông に行くのは、それは村の寺で、自分はこの村の一員なので、行っている。対しては、Chùa Bà に行くのは、天后宮からいつも招待状が来るし、また自身は中国系なので、Chùa Bà の祭礼に参加に行っている。

Chùa Bà に対する認識として、それは子供を産むための神で、女性の間で影響力がある。自分が Chùa Bà に行くのは、神の霊力とは関係なく、明郷村の人々との連携を保ちたいからである。もし今後自分が行けなくなったら、長男に行ってほしいという。

事例5 Hàu (50代、男性)

Hàu の曾祖父の世代から広州から地霊村に移住してきた。曾祖父の世代からチーラン通りにある広東会館に行く。そこで関帝、媽祖の両方が祀られている。広東会館は中国系の人の行くところで、明郷村の人は行かないという。

毎月二回広東会館に行っている。妻も中国系なので、時々一緒に会館に行く。父の世代も会館のみに行っていたので、自分もそれでいい (Chùa Bà に行く必要はない)。なお、会館に行くのは祖先、ルーツを忘れないためだという。

地霊村の Chùa Ông、ディンにも行っている。それらは村の一員という意識で行っている。

明郷村のキン族信者

明郷村では、女性を中心とするキン族村民も多数天后信仰にかかわっている。そのかかわり方としては、村の一員として祭礼の招待状を受けて、祭礼に参加する、つまり地縁的な要因でかかわっているケースと、女神信仰を Chua Ba にダブらせ、信仰しているケースがある。

事例5 Lâm Thị Nu (女性、50代)

キン族、1972年にホーチミンから旦那に従い明郷村に移住してきた。職業はコーヒーショップ経営である。

この村に移住してきてから Chùa Bà に行くようになった。そのきっかけは、天后宮を作った人の中に林という人がいて、関係はないだろうが自分の姓と同じなので、それがきっかけで行くようになった。

時々15日に天后宮に行っている。また、婦人会の祭りにも時々参加している。3月の祭りは一番重要だと認識している。祭りの時に、委員会からお知らせの手紙が来る。一人で行く時もあれば、近所の人たちと一緒に行く時もある (みんなが行くから、自分も行く、また寄付求められたら寄付もしている)。

なぜ Chùa Bà に行くのかは、二つの認識に基づいている。一つは、村に寺があるから行くだけで、もう一つは村の一員であるという認識による。Chùa Bà はディンとしても使われている、と認識している (普通の村にはディンがあるが、この村にはディンがない)。

なお、Chùa Bà に行くことで、自分の心が穏やかになるという。

事例6 Đổ Thị Thỏa (60代、女性)

キン族、母親の出身は明郷村だが、中国人とは無関係である。自身の信仰として、Chùa Bà、女神信仰、仏教（ホンサン村、市内などの寺に行っている）の三つがある。そのうち、一番重要なのは、女神信仰である。Chùa Bà に対しては、村の寺と認識する、仏教寺院と同じような存在だとみなしている。

事例7 Nguyễn Văn Ý (60代、女性)

旦那は戦争避難のため、25キロ離れる村から明郷村に移住してきた。ここで土地と家を買った。夫婦ともキン族である。旦那は農業を営み、自身はよろず屋をやっている。嫁に来てから天后宮に通い始めた。

毎月旧暦15日に天后宮に行く。自分と家族の無事を祈る（この日は多くの女性が行くという）。嫁ぐ前はもとの村の仏教寺院に毎月15日に行っていた。多くのベトナム女性はこのような習慣を持っている。

なお、天后宮に通ううちに女性の友人が増え、お互い誘い合って行くようにしている。

Chùa Bà については、中国の神ということしか知らず、それ以外のことは知らない。中国の神でも今はベトナムにあるので違和感はない。子供を産むための女性の神というイメージをもっている、自分の出産前に安産を祈りに行っていた。

子供8人（3男5女）全員がこの村に居住している。親の影響を受けて、8人とも Chùa Bà に行っている。とくに娘たちは、家族の無事と子供のことを祈るために自分の意志で行っている。自分と娘たちは祭事時に料理の手伝いをしている。

Chùa Bà 以外に、フェの郊外にある廟（Hòn Chén Điện）の女神を信仰し、よく参りに行っている。

事例8 Nguyễn Thị Bông Ý (60代、女性)

明郷村出身者であるが、中国系ではない。曾祖父の上はタインハー村に住み、自分はこの村に移住した4代目となる。

30歳以後、Chùa Bà に行くようになった。村の人なので、祭礼時の料理のお手伝いをしていた。悩みなどがある時、心の中で祈る。

Chùa Bà は不思議な力のある神であると認識している。昔、戦争の時、ベトコンが来たので、Chùa Bà に祈りながら隠れたら無事だった。近年では、1996年に2メートルの洪水があった時、フェ市内、周辺村などで全部100人以上の人がなくなったが、明郷村あたりでは人がなくなっていない。

明郷村以外のキン族信者

フェ市内、ほかの村から、女神信仰として、また子供を生む神として、天后宮に定期的に参りにくるキン族住民も多い。

現に150人前後いる Chua Ba 婦人会の参加者のなかに、村外の人が多く含まれている。それはここ5、6年の変化である、みんな Chua Ba の力を信仰しているためだと明郷村のインフォーマントが言っている。

4、天后信仰の動態性——地縁性による帰属意識の形成

出自からして完全な意味でいう「明郷」ではない村民は、Chua Ba を介する地縁性により、明郷人としてのアイデンティティを獲得するケースがみられる。

また、海外に移住した明郷子孫は、Chùa Bà に対する信仰につながり止められ、地縁性に立脚する信仰の力により、自らの精神的故郷を見いだしたとの現実もみられる。

事例9 Nguyễn Thị Lan（女性、60代）とその姉孫（男性、40代）

明郷村は母親の出身村で、父親の村は Thành Phú である。親はずっとこの村で生活していたが、この村に本当の意味での親戚はいない。Nguyễn Thị Lan は独身で今は姉の孫と一緒に住む（姉はすでに他界した）。

母親は、明郷村の出身で、Chùa Bà によく行っていた。父親はキン族で、Chùa Bà に行く回数は少なかった。子供のときから母親と一緒に Chùa Bà に行っていた。そのため、成人後も行っている。

姉の孫は、バオビンに家があり、そこに両親が住んでいる。自分はこの村で育ち、祖母とずっと一緒だったので、今もここに住む。

二人とも自身を明郷人だと認識する。なぜならここで生まれ育ったからである。

孫も Chùa Bà に行っている。とくに旧正月に行くようにしている。自分の子供が守られていると思うから。孫の妻はタインハー村出身であるが、時々子供のためにお祈りに行く。

事例10 Đoàn Văn Quỳnh（男性、60代）、Trần Thị Như Mai（女性、60代）夫婦

妻の Trần Thị Như Mai は Trần Tiễn 一族の10代目で、陳踐誠と2番目の奥さんの直系子孫である。旦那はキン族でこの家の入り婿、祠堂を管理している。旦那は定年前、フエ大学の先生をしており、漢方の知識を有する。

夫婦二人で5000頁の族譜を整理し、漢字をベトナム語に訳している。なお、旦那は一族の土地と施設を管理するために、Trần Tiễn 基金を設立した。

旦那は Chùa Bà の委員会に誘われなかったが、アドバイザーとしてサポートしている。婿入りしてから Chùa Bà に行くようになった。キン族も中国にルーツを持つから違和感がないという（明郷でない人も Chùa Bà に行ったりするので）。

Chùa Bà は中国人の信仰であると同時に、承天フエ省というローカルな地域の信仰でもある。夫婦からみれば、Chùa Bà は村唯一の古い寺であり、多くの人にとって霊力をもつ存在である。夫婦にとって Chùa Bà はこのほか伝統と誇りでもある。

明郷人を妻にもつ Đoàn Văn Quỳnh は、明郷人としての帰属意識に理解を示している。完全ではないものの、自身もそうしたアイデンティティをもち得ようとしているとみられる。

事例11 アメリカ移住者

明郷村の関係者によると、この村の半分の人口は本来陳氏一族の子孫である。1975年以後の解放後、

200人以上の人はアメリカ移住を選択した。現在村に陳氏一族の子孫は10世帯しか残っていない。

村の10代目長老のĐặngの子孫は当時アメリカ行きの前に、Chùa Bàに祈りに行ったところ、おみくじをひいたら、行かない方がよいという内容だった。それでも、アメリカ行きを敢行した結果、船が沈没したという。

もと明郷村のアメリカ移住者のうち、2、3年に一度帰郷し、Chùa Bàに参りに行く人もいれば、3月の祭礼時によく帰ってくる人もいる。

なお、村のChùa Bà基金の資金源はもっぱらアメリカ移住者たちに頼っているため、海外移住者の信仰心に支えられ、現在の天后信仰が存続できているといえる部分もある。

ベトナムも人生の一つの通過点で、故郷ではないと思っているアメリカ移住者もいるが、明郷村に親族がいることと、天后信仰の関係で、明郷村が結果的に故郷になっているとみられる。

5、祭祀圏の重層的構成とその拡大性

天后信仰の祭祀活動に参加する人々から構成される広域の祭祀圏があるとすれば、その内部構成として明郷子孫が帰属意識に立脚し、祖先の世代から続く信仰を維持するための信者の群が存在していると同時に、女神信仰という認識に基づく村の内外のキン族住民からなる信者の群の存在もみられる。明郷の子孫とされる人々の自己意識、天后信仰に対する認識が必ずしも一本化していない状況のなかで、二つの信者の群の間でダブる部分もあるが、基本的に異なる社会原理に基づく社会関係の群であると認められる。

二つの群の社会関係のあり方、その形成の背景についてみると、まず明郷子孫である人々は、祖先の伝統を継承しようとする意識のもとで、天后の祭礼を行うための組織を結成した。そうした組織の運営をめぐって、一連の関係の網が形成されてきたといえる。それは村内外、また海外移住者である明郷子孫の人々からなる一つの圏域である。一方で、この一群の社会関係の位相として、1月17日の婦人の礼のように、明郷人以外の他者を包摂する方角も見せている。

もう一群の社会関係は、純粹に信仰心という動機に基づく人々から構成されるものである。その構成員として、天后信仰にかかわる村内部のキン族住民のほか、天后宮の祭礼に積極的に参加する村外のキン族信者も少なからずみられる。

上記の二つの社会関係の群は、必ずしも明郷村の境界と一致しておらず、むしろ両者とも村の範囲を越える広がりを見せている。そうした圏域の広がり方は、一方で今日の明郷子孫の地理的分散性を反映し、他方で女神信仰としての天后信仰の信者圏の拡大、天后信仰の影響力の増大を示しているといえる。つまり、今日フェ明郷村の明郷子孫は必ずしも村内に住んでおらず、すでに他所に散らばっているという拡散状態になっている。また、天后信仰はもはや明郷子孫の伝統的信仰というカテゴリーを越え、すでに霊力のある女神として明郷村周辺のベトナムキン族に広く受け入れられているという状況が映し出されている。こうした社会関係の拡散性、拡大性は今日の天后信仰祭祀圏の外縁の拡大をもたらしているのである。

この天后信仰をめぐる祭祀圏の存在は、人々の生活圏の宗教的象徴となるが、その内部構成として「明

郷人」の社会関係群、その圏域は要となるといえる。なぜなら、祭礼実施のための儀礼班や、Chùa Bà 基金、また婦人会という組織の存在は天后信仰の維持において、中心的な役割を果たしており、この信仰を明示的なものにしてしている。しかし、「明郷人」と自認するインフォーマントたち自身はさておき、その子供世代は必ずしも熱心に天后の祭礼に参加していないということがインタビュー調査から分かった。そうした例から分かるように、天后信仰の祭祀圏と明郷の圏域とは完全に重なっているわけではないのである。今日「明郷人」のアイデンティティがかなりあいまいな状態になっている中で、天后信仰は明郷子孫であることを実践する明示的な媒介の一つとなっているが、それも必ずしも完全に「明郷人」の意識的圏域と一致していないというのが現実といえよう。

終わりに

本稿は明郷村と天后宮の歴史的経過を踏まえ、天后信仰の今日的な様相について考察してきた。今日多くの明郷子孫にとって天后信仰は「明郷人」のアイデンティティの維持において重要な宗教的シンボルであることが分かる。その上で天后信仰は空間を越える動的な力もみせ、「明郷人」というカテゴリーの維持、産出に独自の役割を果たしている。なぜなら、天后信仰を介する地縁性に基づき、明郷人としてのアイデンティティを獲得するに至った人も入れれば、本来故郷意識がはっきりしない海外移住者も天后信仰を通して、自身の帰属意識を見いだしたという人もいる。そこから、天后信仰の空間を越えた動態性とその強力がみとれるものである。

一方で、今日明郷村と「明郷人」をめぐる社会関係が拡大し、その中で天后信仰の波及する領域も拡大している。明郷子孫である人々からキン族住民への信仰担い手の拡大は明らかな現象として観察できる。

そのような状況のなかで、天后宮の祭礼とその組織に二つの局面がみられる。一方で、儀礼班と Chùa Bà 基金は排他的な人員構成と性格をみせている。他方で女性信者の組織である婦人会はオープン性を持ち、明郷子孫以外の人の参入も受け入れている。この天后宮の祭礼にかかわる組織と儀礼の収斂性と拡大性は、「明郷人」のアイデンティティのあり方そのものを物語っているといえる。つまり、「明郷人」とされる人々、もしくはそう自認する人々は、自分たちの独自性、そのカテゴリーを維持したいという気持ちもある一方で、さらなるキン族化、土着化の流れを拒むものでもないのである。

最後に「明郷人」と華人とのちがいと両者の関係性について、両者の天后信仰への関わり方を通して検討したい。「明郷人」と華人はともにその祖先が中国に求められるものであるが、両者の違いとして、以下のことがあげられる。今日キン族住民とほとんど変わらない「明郷人」は宗教的祭礼や祖先祭祀を通して、祖先を意識している。それが「明郷人」の「明郷意識」なるものである。そのような「明郷意識」は遠いところからかつての伝統を眺め、それを味わうという今日のベトナム人の中国意識に近づくものといえる。対しては、華人といえる人々にとっては、祖先の「伝統」は生きた現実で、彼らは宗教信仰や方言会館への活動参加を通して、より明確に「伝統」を実践している。このような「伝統」に対する実感の「温度差」、その距離感は両者を分ける基準となっている。

一方で、第3節の事例4の Khuong という人の例のように、華人住民と「明郷人」とは結びつく場合

もある。この二つのカテゴリーに属する人々の自己認識は基本的に異なるものであるが、位相がちがうものの、同じく「伝統」を一種の象徴とみなしているなかで、場合によっては両者の接合も考えられないものではない。